

シェークスピアの作品における  
談話のつなぎ語の意味と文法化

東 森 勲

## Summary

### Meaning and Grammaticalization of Discourse Connectives in Shakespearian Works

Isao Higashimori

This paper argues that a relevance-theoretic account of meaning change (concept loosening and concept narrowing) can provide a good tool for explaining both synchronic and diachronic meaning change of discourse connectives. Relevance Theory can provide a unitary procedural meaning for each discourse connective (*BUT*, *STILL*, *LIKE* and *WHY*) and account for the reasons why each conceptually encoded meaning turns to each procedurally encoded meaning as a phenomenon of grammaticalization. Roughly speaking, grammaticalization of discourse connectives can be characterized as the shift from conceptual to procedural meaning of each lexically encoded item.

In order to explain all the data given, we have shown that RELEVANCE THEORY is 'a unifying theory' which can capture the true nature of the discourse connectives like *BUT*, *STILL*, *LIKE* and *WHY*. A procedural analysis of discourse connectives would explain our lack of direct access to the information they encode and each discourse connective clearly plays a role in the interpretation process by helping the hearer in arriving at the intended interpretation of an utterance. In short, what each discourse connective encodes is not a concept of any kind but a procedure, in the sense of "a way of guiding, or constraining, the inferential phase of communication" (Wilson 1991 : 10).

## 1. はじめに

本稿\*は談話連結詞<sup>1</sup>を通時的にそして、認知語用論的に関連性理論を用いて考察する。

### 1.1. 談話連結詞を通時的に考察することの意義とは何か

最初に談話連結詞として考えられるものの変化を通時的に見る。エリザベス朝英語と現代英語をまず外観して見る。

エリザベス朝英語 (Elizabethan English) における談話連結詞と考えられているもの：

GROUP A: ay, nay, yet, and, but, alas, tut, hark, well, o, ha, I say, I speak, I warrant, I trow, I protest, I assure you (Cf. Jucker 1997: 103, Blake 1992-3: 86-88)

現代英語における談話連結詞として考えられているもの：

GROUP B: actually, after all, ah, almost, and, and <stuff, things> like that, basically, because, but, go 'say', if, I mean, I think, just, like, mind you, moreover, now, oh, o.k, or, really, right/all right/that's right, say, so, sort of/kind of, then, therefore, uh huh, well, yes/no, you know, you see (Cf. Brinton 1996: 279-281)

問題点1以下のシェークスピアの例(1)〔以下 Shakespeare の例は Arden 版に従う〕で使用されている But+still について上記の Group A では but のみを談話連結詞としてあげてあり、このように談話連結詞の連語したものが考慮されていないことが問題である。さらに例文(1)のいくつかの日本語への翻訳を比較するとこのような談話連結詞の理解にかなりのゆれがあることである。i) 坪内逍遙と ii) 小田島雄志の以下の訳を比べると、i) は but+still 全体を「ところが」と「とかく」の2つの部分で訳をつけ、ii) は「たえず」と「が」の部分で訳をつけている。現代英語の but+still の例(2)の訳では両者をまとめて「だが」と訳をつけている。すなわち、but+still の連語のみを問題にするだけではなく、それぞれの語の意味変化と文法化がここにかかわっていると思われる。

(1) *But still* the house-affairs would draw her thence,

——*Othello* I, iii, 147

- i) ところが、家事向きの用があって、とかく、呼び立てられます。(坪内訳)
- ii) たえず家事のために席をはずしましたが (小田島訳)

(2) *But still*, we're not as young as Jessica and Davey. -Segal, *Man*

でも私たちはジェシカやデイビーほど若くはないわ (小西編1989: 1767)

また例(3)を見れば分かるように、Group A にはよく出現するはずの why (いわゆる間投

詞的用法で本稿では談話連結詞と呼ぶ用法)が漏れているし<sup>2</sup>、Group B の like (談話連結詞)へ行く途中段階の like がすでにシェークスピアの中にあることも分かる。

(3) ISABELLA: Alas, alas; *Why*, all the souls that were forfeit once, And He that might the vantage best have took. Found out the remedy. How would you be, If He, which is the top of judgement should But judge you as you are? O think-on that, And mercy then will breathe within your lips *Like* man new made. -*Measure for Measure*, II. ii, 72-79 (1623 The First Folio)  
ああ、なんていうことを！この世に生まれた人間はそれだけで罪を犯しています、それでも神は罰しようとはなさらず、救いの道をお示しになりました。もしも最高の裁判官である神が、いまのままのあなた様を裁かれるとすればどうなりましょう？それをお考えになれば、その唇に慈悲のことがわきあがってくるでしょう、生まれ変わった人のように (小田島雄志訳)

なお、従来の談話連結詞の研究の遅れに対する批判は以下の引用から明らかである：

'modern editors of Shakespeare have never paid attention to the possibilities of discourse markers and have consequently not been willing to consider alternative interpretations which involve such markers' (Blake 1992-3: 83)

それゆえ、本稿では具体例として、but, still, why, like の意味変化と文法化を中心に関連性理論の枠組みでこのような通時的変化をいかにとらえられるかを以下で検討する。

## 1.2. 談話連結詞の通時的研究に基づく先行研究

### 1.2.1. 関連性理論による先行研究

英語談話連結詞の通時の研究としては、関連性理論に基づく Jucker (1997) の well に関するものがあり、関連性理論による利点とは多様な well の語用論的用法が1つの統一した手続きの意味として、すなわち、いかに頭の中で計算するかという交通信号ような働きを示し、well は「すでに聞き手がもっている知識の組み替えをしてください」という談話連結詞として分析可能であることを示している。

また、文法化と関連性理論の研究としては、Nicolle (1998) の be going to の文法化の研究が注目される<sup>3</sup>。彼は次のように、文法化とは関連性理論では時間とともにある表現が<概念的 (conceptual)>意味から<手続きの (procedural)>意味へと変化していくことと考えている：grammaticalization involves a shift from conceptual encoding to procedural encoding in a single expression over time. (Nicolle 1998: 6)

関連性理論では言語表現の意味を (i) concept (概念) を記号化する場合は conceptual (概念的) と呼び、(ii) information about computations (計算に関する情報) を記号化する場合は procedural (手続的) と区別する。

また概念と関連性の原則は次のように規定されている：

- (i) Concepts are psychological entities at a fairly abstract level and conceived of as consisting of a label or address with three entries : logical, encyclopedic and lexical.
- (ii) The meaning of a word is an irreducible (i.e. holistic) concept.
- (iii) All simple monosyllabic concepts are innate.
- (iv) Every utterance and concept has a variety of linguistically possible interpretations.
- (v) Hearers are equipped with a single, very general criterion for evaluating interpretations, which is called Second Principle of Relevance (or Communicative Principle) :  
Every utterance or concept creates an expectation of relevance.
- (v) Relevance is defined in terms of contextual effects and processing effort.

談話連結詞 *but, still, like, why* に至るまでの概念の変化などを以下で検討する<sup>4</sup>。

なお関連性理論による談話連結詞に共通した働きは以下のように述べられる：

Discourse connectives impose constraints on implicatures : they guide the search for intended contexts and contextual effects. (Wilson & Sperber 1993 : 21)

### 1.3. 本稿の目的

英語の談話連結詞のなかで、前置詞あるいは形容詞から談話連結詞へと文法化がおこなわれたと考えられる *but, still* と *like* を取り上げ、関連性理論の枠組みでそれぞれの意味変化をどのように一般化できるか、またその際の問題点を指摘することである。空間認知の「外側にある (=be outside of)」の意から、「予測していることを打ち消しなさい (denial of expectation)」という手続き的意味を記号化すると考えられる談話連結詞の *but* へ、また「じっとして動かない」の意を表す *still* の用法から同じく「denial of expectation」の用法へと変化した談話連結詞 *still*、「類似している」の意の *like* から「loose talk (大ざっぱな言い方)」を表す解釈の方を選びなさい」という情報を手続き的意味 (procedural meaning) として記号化 (encoding) すると特徴づけられる談話連結詞 *like*<sup>5</sup>への変化、これらの通時的現象を文法化 (grammaticalization)、意味変化 (semantic change) の観点から再検討したい。さらに、疑問詞から感嘆詞 (interjection) へと変化した *why* についても関連性理論での取り扱いでどうなるかを検討する。

### 1.4. 関連性理論による意味変化の説明原理

Carston (1996a : 74-76) を援用して、concept の変化の原理をまとめてみよう。

意味変化 I

Concept narrowing : 記号化された語彙的概念 (Lexical concept) が伝達される場合に伝達された概念 (Communicated concept) がもとの一部分に狭くなる意味変化

例 (i) : He wears *rabbit*. (*rabbit* はウサギ全体の概念から「ウサギの毛皮」のみを指して狭くなっている。この場合は一種のメトニミーの現象。)

- (ii) mutton (mutton はフランス語ではもともと羊の肉だけでなく羊自体も表したが英語に借用されて「羊の肉」のみを狭く指すようになった)

#### 意味変化Ⅱ

Concept loosening 1 : Lexical (=L) concept から Communicated (=C) concept になるときにもともとの概念以外にも広がる意味変化

例 (i) This room is *rectangular*. (*rectangular* はもともと長方形をあらわすが、実際はく本当の長方形+すこしは長方形に似ているもの>もゆるやかに指す)

- (ii) *bird* が OE *bryd* では 'young bird' を狭く指していたが、現代英語ではダチョウ・ペンギンまでをも含む「鳥類全体」を広く指している。

#### 意味変化Ⅲ

Concept loosening 2 : L concept から C concept になるときにもともとの概念とは全く範疇などの異なるものを指すようになる意味変化

例 (i) Where's my plastic *duck*? (*duck* は生きているアヒルの意から「本来の生きたアヒルはまったく含まないが、何らかの意味でアヒルの形などに似たもの」を指す。

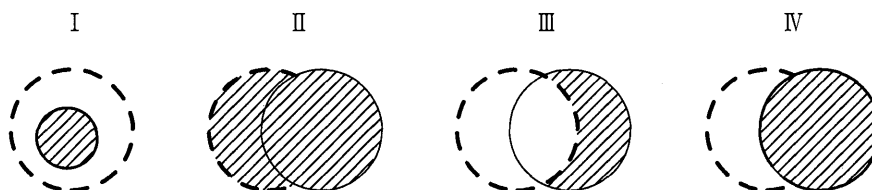
- (ii) *bitter* (12世紀に *biting* 「かむこと」の意を表していたが現代英語では *biting to the taste* 「(味が) にかい」の意となった)

#### 意味変化Ⅳ

Concept loosening 3 : L concept から C concept になるときにもともとの概念の一部を残しているが、それ以外の部分がむしろ意味の中心として使われるように広がっている意味変化

例 (i) I like *bald* men. (*bald* はもともとは髪の毛の一本もないことを指すが、実際の用法では「少しは髪の毛の残っている状態」を指すことが多い)

以上の意味変化を図示すると、次のようになる。点線の円がもとの Lexical concept で L で表し、Communicated concept は斜線で示した範囲となる。



## 2. 談話連結詞 *but*, *still*, *like*, *why* に関する先行研究

*But* に関する関連性理論からの研究は Blakemore (1989), Higashimori (1992) がある。

*loose talk* と関連性理論に基づく共時的研究としては Andersen (1998) の *like*, Itani (1995) の *sort of* の研究がある。間投詞 (*interjections*) については、Wilson & Sperber (1993) に *Huh* に関するものがある。

## 2.1 BUT

### 2.1.1. BUT の談話連結詞としての現代英語の働きについて

Blakemore (1989: 46) による現代英語の *but*, *still* の共通項は以下のように説明されている。

(4) A: I wish I didn't have to work today.

B: *But* it's Friday.

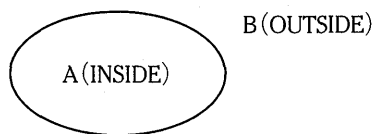
(5) A: I wish I didn't have to work today.

B: *Still*, it's Friday. — Blakemore (1989: 46)

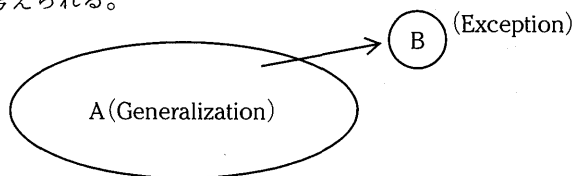
(B) suggests that the implications of A's having to work are cancelled by the fact that it's Friday. Blakemore のこの説明の問題点は BUT に続く (it's Friday) はいわゆる新情報を表すのに STILL に続く (it's Friday) は通例、聞き手がすでに知っているいわゆる旧情報であり、情報の連続性 (continuity) も示していることの説明が欠けてことである。Still は関連性理論では同じ事を繰り返し表現しても情報として、意味がある場合があるのと同様に、相手に古い情報を再び頭の中に思い出させあらたに導入する用法 (reminder) と特徴づけられる。その reminder の内容がすでに聞き手 (あるいは話し手) が知っていた何らかの含みを否定することになる (Cf Higashimori 1992: 346-348)。

### 2.1.2. BUT の通時的意味変化と文法化をめぐって

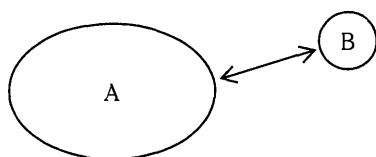
BUT-1 : もともと 'be outside of' (OED) の意で、空間 (space) に関する概念的 (conceptual) 意味を記号化していた<sup>6,7</sup>。(日本語の逆接を表すところでも場所を意味するところ>から文法化していることも興味深い。)



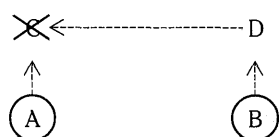
BUT-2 : 'except' の意で、一般化から例外を外側に取り出す処理 (outward processing) が加わり、BUT-1 の具体世界から、BUT-2 へは例外処理という抽象世界へと概念の広がり (上記の意味変化 III により説明可能) があると説明できる。この BUT-2 も概念的意味を記号化していると考えられる。



BUT-3：対照的用法 (contrast use) の BUT-3 は A と B が対立することを表す手続き的 (procedural) 意味を記号化する。双方向に比較する処理が行われる (矢印の向きが両方にあることで図示される)：



BUT-4：denial of expectation use の BUT-4 は、A と B のそれぞれが、さらに含み C と D をそれぞれ暗に意味し、その C を D が後ろ向きに否定 (backwards contradiction) すると特徴づけられ、手続き的意味を記号化している。



それぞれの具体例を見てみよう。

(6) Old English: *Butan* ære wic-stowe—OED

(7) ROMEO: And *but* thou love me, let them find me here.

—*Romeo and Juliet* II, ii, 76. (i.e. “except or without thou love me.”)

とはいへ卿 (そもじ) に愛せられずば、立地 (たちどころ) に見附けられ (坪内訳)、

(8) 1711 STEELE Spect. No.144, p.8 Her face speaks a Vestal, *but* her Heart a Messalina. —OED

(9) 1691 NORRIS Prait. Disc. To Rdr. 5 Now we Discover better, *but* we live worse. —OED

## 2.2. 談話連結詞 still をめぐって

### 2.2.1. 現代英語での談話連結詞 still の特徴

例文 (5) で見たように以下の2つの特徴としてまとめられる。

- (i) a denial of expectation use
- (ii) a reminder (of the hearer or the speaker)<sup>8</sup>

### 2.2.2. 通時的な still の意味変化と文法化

STILL-1：もともとある物が空間位置で同じ位置にあり、<motionless>の意を概念的意味として記号化していた。

A -----> A

STILL-2：空間概念から時間概念、すなわち空間位置から時間軸に沿って同じ状態が続いていること (continuation) を表すように概念の loosening (上記の意味変化Ⅲにより説明可能) が行われ、概念的意味を記号化している。

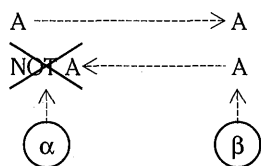
A -----> A

BEFORE

AFTER



STILL-3 : 同じ考え A が聞き手 (あるいは話し手) の頭の中で継続していて (A ---->A)、言語表現  $\alpha$  Still,  $\beta$ . で  $\alpha$  と  $\beta$  のそれぞれから推論される含み NOT A と A であり、以前からあたまの中にある予測 A を残して、NOT A を後ろ向きに否定する処理をするという手続き的意味を表す。



それぞれの具体例 :

i) 「動かないでじっとして」の意 <cf. She lay absolutely *still* on her bed.><sup>9</sup>

(10) Come, let me clutch thee : -- I have thee not, and yet I see thee *still*.

Art thou not, fatal vision, sensible To feeling as to sight ? --*Macbeth*, II, i, 34-7

さあ捕まえるぞ。だめだ、捕まえられない、だがそこにじっとしているのが見える。

目には見えても手に触れることはできぬのか。

ii) 「常に」の意 (文中・文尾位で用いられる)<sup>10</sup>

(11) a. Escalus : Pardon is *still* the nurse of second woe. --*Measure for Measure* II, i, 281

慈悲はつねに温顔を見せておると慈悲ではなくなる。

b. I to myself am dearer than a friend, For love is *still* most precious in itself,

--*The Two Gentlemen of Verona*, II, vi, 23-4

友だちより自分に忠実であることが大事、というのも恋そのものがいつも一番大切。

c. POMPEY : I'll be your tapster *still* ; --*Measure for Measure* I, ii, 100

番頭役は相変わらずこのあたしがつとめます。

iii) 「それでもなお、まだ」の意 <cf. I'm *still* hungry. /I know you don't like her, but you *still* don't have to be so rude to her.>

(12) I see thee *still* ; And on thy blade, and dudgeon, gouts of blood, Which was not so before.

--*Macbeth*, II, i, 46-7

まだ見えている、それに今度は剣のつかと刃に血糊がついている、

前には無かったはずだ。

問題点 2 STILL-2 ----> STILL-3 へと継続の意を保持しながら、談話連結詞への移行している場合、あるいは STILL-2, STILL-3 の両者にあいまいに解釈可能な場合が現代英語でもシェークスピア英語にも見られる :

(13) a. We *still* haven't solved our problems. ——小西編 (1989 : 1765-8)

私たちは依然として自分たちの問題が未解決のままである。 <STILL-2 >

そうは言うけれど私たちは自分たちの問題が解決していない。 <STILL-3 >

b. However much advice we give him, he *still* does exactly what he wants.

私たちが彼にどれほど忠告してもやはり彼は自分の思い通りのことをするんだから。

(14) ISABELLA : Yes, he would give't thee, from this rank offence, So to offend him *still*.

—Measure for Measure, III, i, 99–100

彼は、私が汚らしい罪を犯せば、あなたを許してやると言う。

でもそれではあなたは罪を犯し続けることに変わりはない。(日本放送協会編訳)

本稿では *still* が形容詞 (概念的) → 副詞 (概念的) → 談話連結詞 (手続き的) として意味を変え、さらに文法化 (grammaticalization) されたと考えるが、それぞれの間段階も存在していることから、同じ語彙項目が人間の頭の中では概念として登録され、さらに計算用の信号の意を表すものとして登録可能であることを示している。

問題点3 *but still* の連語でいつごろから談話連結詞として、用いられているのか、また、その意味の計算はどのようにして行われ、どのように説明可能かという問題がある<sup>11</sup>。

100万語の現代米語コーパス Brown Corpus (1961に作成された) をみると文中で離れてでてくる (*but...still*), くっついてでてくる (*but still*), 文頭の (*But still*), 文頭の *Still* の実例の数は以下ようになる。

<i>but... still</i>	<i>but still</i>	<i>But still</i>	<i>Still</i>
48	15	2	2

また OED<sup>2</sup>-CDROM では年代順に並べ替えて調べてみると、

	<i>but still</i>	<i>But still</i>
1300–1500	0	0
1500–1570	3	0
1570–1640	29	5
1640–1710	19	3
1710–1810	21	8
1810–1910	89	15
1910–	65	3

*but still* がかなり、用いられていること、そして、文頭位で用いられると、談話連結詞としての用法が確立され、*But still*, とコンマで区切られると (*Still*,<sup>12</sup>の場合も同様に) さらに、独立した要素として機能していることが予測される。以下のデータはこの文法化が1500年代からすでにあり、現代英米語でもさらに進行しつつあることが分かる。

STEP-1 : *but...still*

(15) His mother was nudging him, *but* he was *still* falling. (以下例(21)まで Brown Corpus)

STEP-2 : *But...still*

(16) *But we still* have a long way to go.

STEP-3 : *but still*

(17) Shorter booking, *but still* a booking.

(18) The big tanks were at the site *but still* sunning themselves.

STEP-4 : *But still*

- (19) *But still* Mel Chandler was not completely convinced that men would really die for a four-syllable word, “Garryowen”.

STEP-5 : But still,

- (20) *But still*, the proposition is worth examination.

- (21) *But still*, I still think that's quite good. —British National Corpus (=BNC)

近代英語によるデータ :

STEP-1 : but...still

- (22) 1860 Meg had told her adventures gayly and said over and over what a charming time she had had, *but* something *still* seemed to weigh upon her spirits. —Louisa May Alcott, *Little Women*

STEP-2 : But...still

- (23) 1763 *But* damon *still* I seek in vain —Frances Brooke, *The History of Lady Julia Mandeville*

STEP-3 : but still

- (24) 1596 yet he for nought would swerue from his night course *but still* the way did hold to faery court—spenser, fq, canto 12. 353, 15— (Michigan Early Modern English Database より)

- (25) 1684 The Sun hath told, I fall, *but still* shall prove Midst shades below a deadly plague to Love : —creech theocritus (tr.), idyll., i, p.7

STEP-4 : But still

- (26) 1623 Let never day nor night unhallow'd pass, *But still* remember what the Lord hath done. —*The Second Part of King Henry VI*, II, i. 84-85

以後は、昼でも、夜でも、神が汝に下しおかれた御こう恩を感謝することを忘れてはならんぞ。(坪内訳)

STEP-5 : But still,

- (27) 1903-5 I cannot explain the practical things of life. *But still*, we are aware, my friend, that love-gages may take strange shapes. —Conan Doyle, *The Return of Sherlock Holmes*

問題点4 コーパスで検索すると以下の (27)-(29) は but と still の共起する例 (AND search による) として、でてくるが、シェークスピアの英語では BUT-4 + STILL-2 の段階である。すなわち BUT-4 <手続的> + STILL-2 <概念的> という段階であると分析可能である。

- (28) *But* this thy countenance, *still* lock'd in steel, I never saw till now.

—*Troilus and Cressida* IV, v, 195.

けれども、こんなに鋼鉄 (はがね) のような面附 (かほつき) をしていなさるのを見たのは初めてだ。i.e. “because it was constantly lock'd in steel.”

- (29) 1623 *But still* the house Affairs would draw her thence

—*Othello* I, iii, 147. [=例 (1)]

- (30) *But that still* use of grief makes wild grief tame, My tongue should to thy ears not name my boys—*Richard the Third*, IV, iv, 230–231.

うち続く悲しみに慣れて激しい嘆きを投げる力もない。でなければこの舌がおまえの耳に子供の話をする前に… (小田島訳)

問題点5 それではこの BUT-4 + STILL-2 のように、＜手続的＞＋＜概念的＞で談話連結詞として、使われる例はあるのか、というと、以下のような場合がある。

SO + CONSEQUENTLY :

SO は「後続く命題 (Q) を結論 (conclusion) として処理せよ」という手続的意味を持ち、CONSEQUENTLY は高次の発意 (Higher-level explicature) 'It is a consequence of P (先行命題) that ...' という概念的意味を持つ関連性理論では説明可能で、両者は結合可能である。

- (31) a. 1607–8 This motion for that the person of a Prince or Lorde of the Revells had ot bin(n)e knowen amongst them for thirty yeares, & *so consequentlye* the danger, charge, and trouble of such iesting was cleane forgotten) was p(re)sentlye allowed, and greedilye apprehended of all :  
—higgs, christmas prince (malone soc., 1923), 4, 1. 42 (ms. p.5&6)
- b. 1611 CORYAT Crudities (1776) 40 *So consequently* they should be capricornified.
- (32) a. *So consequently*, th there was no er, the there was no free beer. —以下3例は BNC
- b. It would have been still worth one million pounds had it not been cancelled of course, and the item is acutally cancelled, *so consequently*, naturally not.
- c. Mm, she worked and she worked night shift as well, you know they had to do alternative shifts, *so consequently*.

現代英語では (32) が示すように So + consequently が文頭・文中・文尾位で自由に談話連結詞として用いられていることが分かる。次の表から分かるように1300年代からこの連語で用いられていることが OED 2-CD-ROM で確認できるし、現代英語の BNC にも28例あることが分かる。

OED 2-CDROM—	so + consequently
1300–1500	3
1500–1570	0
1570–1640	5
1640–1710	3
1710–1810	1
1810–1910	0
1910—	0
BNC	28

問題6 BUT-4 +STILL-3 の連語関係における意味の計算をどのように説明するのか。

Cf. Higashimori (1992)

処理方法 データ	backwards contradiction	cognitive precondition
X BUT-4 Y	+	-
X STILL-3 Y	+	+

この表から分かるように BUT と STILL はともに the second proposition (Y) が the first conjunct (X) からでてくるコンテキストの含み (Contextual implications) を後ろ向きに否定するといふ the denial of expectation use を持ち、両者の違いは STILL が the hearer's cognitive precondition of ii を持つことである [以下の例 (33) 参照]。現代英語では上例 (2) のように BUT-4 と STILL-3 の類似性のために、共起することが多く、backwards contradiction の意味を強めると説明できる。

(33) John's a strange guy. *But still*, I like him.

BUT-4 の手続的意味は以下の iii (I like John) が (i) の知識 + John's a strange guy [先行発話] からでてくる帰結 (I don't like John) を後ろ向きに打ち消す (backwards contradiction) 働きであり、

i. Context for interpreting the first conjunct :

If he is a strange guy, I don't like John.

iii. The second conjunct : I like John.

STILL-3 は i, iii 以外に、さらに、ii の先行認識を a reminder to the speaker of what he already knows or believes として持ち、BUT-4 と同じく backwards contradiction の手続的計算をしていると考えられる。

i. Context for interpreting the first conjunct :

If he is a strange guy, I don't like John.

ii. I already know or believe that I like John.

iii. The second conjunct : I like John.

## 2.3. 談話連結詞 like をめぐって

### 2.3.1 談話連結詞 Like への文法化<sup>13, 14, 15, 16</sup>

Romaine & Lange (1991 : 244) は以下の例をあげて like の文法化を説明している。

(34) She looks *like* her father. <Preposition> — 'a marker of comparison' (p.246)

(35) Winston tastes good *like* a cigarette should. <conjunction>

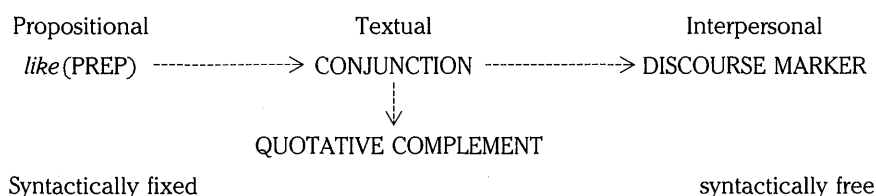
(36) And there were *like* people blocking, you know? <discourse marker>

(37) Maya's *like*, "Kim come over here and be with me and Brett." <discourse marker with quotative function>

The first stage in its route to becoming a quotative complement is its use as a preposition,

where *like* is subcategorized to take a nominal or pronominal complement. It undergoes recategorization so as to take a sentential complement. This involves treating a subordinate clause as a nominal constituent so that *like* is extended to it by analogy. At this stage *like* can be used as conjunction or complementizer, as in the Winston example in (35) above. Because *like* can appear as a suffix following an item..., it can be reanalyzed as a discourse marker, which shows syntactic detachability and positional mobility. When *like* precedes a clause or a sentence which is a quotation, it functions as part of quotation frame. —Romaine & Lange (1991 : 261)

Grammaticalization of *like* (Cf. Brinton 1996 : 62)



問題点 7 最新の英米の多くの辞書は (34) の look like の *like* および、次の (38a, b) のような be like の *like* の品詞を前置詞として扱い<COBUILD<sup>2</sup>, OALD<sup>5</sup>, LDOCE<sup>3</sup>> (Cf. CIDE Prep, conj) そして、限定用法 (*like* mind や例 (39) のような例) の *like* は形容詞として扱っている。上記の図式ではこの前置詞用法と形容詞用法の文法化が明示されていないので、問題である。

(38) a. You're too much *like* your old man. —*Back to the Future*, p.7

b. ISABELLA : Go to your bosom, Knock there and ask your heart what it doth know  
that's *like* my brother's fault ; —*Measure for Measure*, II, ii, 138

どうかご自分の胸を訪ね、扉を開き、そこに私の兄と同じ罪の心がないか、お聞きになってください

(39) Then we are of *like* age—how interesting ! —BNC

それゆえ本稿では LIKE の意味変化を認知的に次のように考える。

LIKE-1 : <概念的>な意味で similarity を表し、外観や性質が同じような状態を記述する  
形容詞用法。OED 2-CD-ROM では形容詞の初出年は1200年となっている。

adj c1200 ORMIN 7931 pezzre sang iss *lic* wipp wop.

LIKE-2 : この similarity という<概念的>意味を保持しながら、比較対照を NP に限定すると、前置詞用法となる。これも異なる範疇となることから上記の意味変化Ⅲにより説明可能。

LIKE-3 : さらにこの similarity という<概念的>意味の比較対照を S に限定すると、接続詞用法となる。これも上記意味変化Ⅲによる拡張と考えられる。

LIKE-4 : さらに、文と文を結びつける要素から、談話連結詞として、「LIKE に後続する表現

はおおざっぱな内容ですよ」という交通信号の働きをし、近似値をのべたり、別のことを暗に示したり、これから示しますよ（発話を再開するときや何も言わずに考えている silent filler）という役目を果たす＜手続的＞意味を表すと分析可能である。談話連結詞 like の様々な働きに対する共通項は次のように考えられる：

a pragmatic marker of loose use of language, encoding a procedural constraint on the explicatures of utterances. —Andersen (1998 : 148)

OED 2-CD-ROM ではこの用法の初出年は1778年である。

dial. and vulgar. Used parenthetically to qualify a preceding statement = 'as it were', 'so to speak'. Also, colloq. (orig. U.S.), as a meaningless interjection or expletive.

1778F BURNEY Evelina II, xxiii. 222 Father grew quite uneasy, like, for fear of his Lordship's taking offence.

具体例を見ると上例（3）の like は LIKE-2 から LIKE-3 への移行と考えられ、シェークスピアには LIKE-4 は全く観察できない。

LIKE-1 :

(40) DUKE : We do condemn thee to the very block Where Claudio stoop'd to death, and with like haste. —*Measure for Measure*, V, i. 412-413

私はおまえに死刑を宣告する、クロードイオが処刑されたあの断頭台で、彼と同様、早急にだ。

LIKE-2 :

(41) ISABELLA : So you must be the first that gives this sentence, And he, that suffers. O, it is excellent To have a giant's strength, but it is tyrannous to use it like a giant.

—*Measure for Measure* II, ii, 107-110

ではあなた様がその法律の最初の執行者に、兄が最初の犠牲者にならなければなりませんのね。巨人の力をお持ちになるのはけっこうですが、その力を巨人のようにお使いになるのは暴虐です。

(42) DUKE : But, like a thrifty goddess, she determines Herself the glory of a creditor,

Both thanks and use. —*Measure for Measure*, I, i, 38-40

計算高い女神にふさわしく、債権者として感謝のみでなく利子までもとりたてようとの魂胆なのだ。

LIKE-3 :

(43) Marty, you're acting like you haven't seen me in a week. —*Back to the Future*, p.75 LIKE-4

(44) a. It's like Doc always says...—*Back to the Future*, p.8

b. I decided that I'd go and, like, take a picture of him while he was in the shower. —CO-BUILD<sup>2</sup>

Andersen (1998 : 154) によると現代英語で談話連結詞 LIKE-4 のおおざっぱな内容の対象と

なりうるものは統語的に様々な要素であり、like が焦点としてかなり自由にいろいろなものと結びつくことがわかる。<>は焦点の scope を示している。

Object of loose interpretation	Pragmatic scope of <i>like</i>
numeral expression	the re=most latest ones have been from <i>like</i> ----> <six> years ago
other measurable unit	and there's <i>like</i> ----> <that much> gap between the earth and the top of the thing.
NP	Well I think they must have made it so conscious for <i>like</i> ----> <fags and booze>.
VP	Scott said to me if Paul <i>like</i> ----> <tries to take on Ollie> he's just gonna break it up
AdvP	He lives in Mallorca, <i>like</i> ----> <really close to my house>.
AdjP	But Megadrives do make their game, their games <i>like</i> ----> <easy> as well.
PrepP	and she'll completely ignore you and you're left and she' l do that <i>like</i> ----> <at a dinner party> or something.
whole declarative proposition	<i>Like</i> ----> <she' s got enough.> You don't show it but <i>like</i> ----> <she don' t go out and buy new posh clothes and everything.>
whole interrogative proposition	<i>Like</i> ----> <who was it who reckoned there was a corner on a boat?>
direct quotation	but I stand up here, when I see him I'm <i>like</i> ----> <oh yeah ha ha> you know laugh along with his jokes and

問題点 8 Andersen の上記のデーターも不十分で、以下のように like が文尾位に用いられ、焦点化が順行でなく逆行方向に処理して、説明すべきものも多い。データーは BNC による。(45) は like が談話連結詞として、さらに、統語的に自由に振る舞っていることを示す。

(45) a. AdjP : ' <Confidential,> <----- *like*.

b. whole declarative proposition : <I think we'd better ourselves,> <----- *like*.

c. whole negative proposition : <This woman doesn't know anything,> <----- *like*.

問題点 9 loose talk を表す談話連結詞 like と sort of の違いはあるのか<sup>17, 18</sup>。

<手続的>意味を表す要素は通例、論理演算子の外側にあり、たとえば、直接、否定されることはないと定義される。談話連結詞 LIKE はメタ言語的否定 (metalinguistic negation) <Cf. Carston (1996b)> のスコープの外側にあり、影響を受けないが、同じく loose talk を表す SORT



OF はスコープの内側にあり、影響を受けるという違いがある。

(46) a. Peter: You were sort of drunk last night weren't you?

Mary: I wasn't *SORT OF* drunk I was DRUNK.

b. Peter: You were like drunk last night weren't you?

Mary: \*I wasn't *LIKE* drunk I was DRUNK. —Andersen (1998)

また、次のような SORT OF + LIKE の共起の多いことも＜概念的＞＋＜手続的＞意味の連鎖として、SO + THEREFORE の＜手続的＞＋＜概念的＞との逆転したものとして扱われ、処理順序の異なるタイプ化の例として重要である。関連性理論では談話連結詞を見ることで人間の頭の中での処理過程が間接的に解明でき、Brain science にも新たな情報を提供できると思われる。COLT の sample database を用いて検索すると、sort 145 例のうち、sort of + like と連語しているものが、24 例あった。以下の例は BNC による。sort of + like が文頭・文中・文尾位で 1 つの単位として用いられていることが分かる。

(47) a. Gradually it *sort of like* brings people out of themselves and do you know what I mean, they learn to do things.

b. *Sort of*, *like* when your combing your hair, innit erm, in the bath keeps on, do my hair, do my hair.

c. Well you put aother word in between each letter of the other word *sort of like*.

問題点10 談話連結詞 like と副詞 roughly との違いは何か？

(46) と同様に ROUGHLY は (48a) のようにメタ言語的否定を受けるが、談話連結詞 LIKE は (48b) が示すように否定の影響を受けない。すなわち、ROUGHLY は＜概念的＞であり、頭の中で概念として、把握できるのに対して、談話連結詞 LIKE は＜手続的＞であり、すぐには何を指し示しているのかというのは難しく、計算の処理のみを記号化している事が分かる。

(48) は Andersen (1998 : 161) による。

(48) a. Peter: You wrote roughly four pages.

Mary: No I didn't write *ROUGHLY* four pages, I wrote EXACTLY four pages.

b. Peter: You wrote like four pages.

Mary: \*No I didn't write *LIKE* four pages, I wrote EXACTLY four pages.

## 2.4. 談話連結詞 why をめぐって<sup>19</sup>

最後に why について少し考えてみよう。

この間投詞的用法の WHY についての最近の論文での扱いはまちまちで、たとえば、Taavitsainen (1995 : 440-1) は interjections も a subgroup of pragmatic markers で扱うとしながら、WHY ! は問題多しとして、実際の分析をしていないし、Fraser (1999 : 943) は間投詞は pragmatic idioms で扱うべきで、談話連結詞とは別扱いを提案しているが、本稿では＜手続的＞意味を表すものとして分析を進める。

OED 2-CD-ROMによると疑問詞 why は Old English から用例あり、談話連結詞（あるいは間投詞的用法）は1519が初出年である。

ここまで述べてきた BUT, STILL, LIKE と WHY との違いは<手続的>意味を記号化しているのは、共通だが、例えば、BUT などは推論にかかわる制約を記号化している

<Adopt the conclusion drawn from Q, and deny the previous conclusion.>のに対して WHY は高次の発意(higher-level explicatures)に対する制約を示す<Process Q as an unexpected matter.>。すなわち表現は 'WHY, Q' でも WHY の手続的意味は The speaker doesn't expect that Q from her previous cognitive assumptions. の下線部分の制約をするという点が異なるので注意。

WHY-1：結果は分かっているがその原因が不明の場合に、その原因と考えられるところの論理形式 (logical form) に穴があいていて、そのギャップを埋めて下さいというのが、疑問詞 WHY の働きである。

The speaker asks the hearer to complete the relevant answer (for x reason) in the encoded logical form.

WHY-2： '(P). Why, Q.' の形式で用いられ、「Qを話し手がすでに持っていた認知的想定、すなわち、知識からは予測できないことであり、聞き手に後続する内容に注意するように示す信号」の役割を<手続的>意味として、になうと考えられる。そこから、意外な発見をして、驚いたり、質問など簡単すぎると抗議したりと、いろいろな用法の説明が可能である。

Schourup (1995: 179) は両者の意味のつながりを次のように説明している。

The semantic link between particle and interrogative could then be found in the notion of unexpectedness... as a component of surprise: when one encounters something unexpected, one is apt to be puzzled and to ask Why?

具体例として、現代米語の例を説明しよう [なお、シェークスピアの例 (51) も同様の説明が可能]。

(49) Marty: Okay, Doc, this is it.

Brown: (on TV) Never mind that. Never mind that now. Never mind that, never mind.

: Why, that's me. Look at me. I'm an old man. —*Back to the Future*, p.35

<過去の世界に戻ったものが、現時点でとったあったビデオに写っている自分を見てあまりに年老いているので予測していなかったことでとても驚いている場面>

下線部は以下のように分析可能：

The speaker (= BROWN) doesn't expect <that is the speaker>.

Shakespeare の作品で、WHY-1, WHY-2 の数を調べると

例 作品名	The Tempest	Measure for Measure
WHY-1	3	8
WHY-2	8	2
TOTAL	11	30

圧倒的に WHY-2 が多いが、現代イギリス英語をもとに作成した British National Corpus では WHY の総数は50877とあるが、'Why, thank you.' のように WHY-2 と考えられる例はわずかしい。

WHY-1 の例

(50) *Why dost thou not speak, Elbow ? —Measure for Measure II, i, 58*

なぜ答えぬ、エルボー？

WHY-2 の例

(51) TRINCULO: *Why, I said nothing. —The Tempest III. ii. 50*

何だと、俺は何も言ひはしねえ。

問題点11現代英米語では WHY-2 は文頭位で用いられることが多いが、BNC で品詞の tag を用いて、WHY-2 のみを用いて検索しようとしても、like のようにはできないので、共時的データからのコーパスを用いた抽出も難しい。

like=PRP (Preposition) .....108988  
 like= AJ 0 (Adjective (general or positive)) .....2635  
 like=CJS (subordinating conjunction) .....690  
 like=AV 0 (general adverb) .....3318  
 like=UNC (Unclassified items) .....6  
 like=AJ 0 –AV 0 (adjective –adverb) .....1345

また、通時的な話し言葉のデータ (spoken data) をどのように入手するのというのも問題もある。書き言葉ではつぎのように Punctuation で WHY-2 と判断されるが、informal な話し言葉からの直接的な分析には困難さがある。

(52) PISTOL: (...) Sir John affects thy wife.

FORD: *Why sir, my wife is not young. —The Merry Wives of Windsor II. i. 108–109*

#### 4. おわりに

本稿では Conceptual (概念的) ----> Interpretive (解釈的) という変化が文法化における歴史的に一貫した原理かということを談話連結詞 BUT, STILL, LIKE, WHY を用いて検討した。それぞれ通時的には中間段階のあることも分かった。すなわち、STILL のみで、<概念的>および<手続的>意味をかねてもっている場合がある。また、談話連結詞が連続する場合のことも検

討した（日本語でも＜だが＞＋＜しかし＞のように連語することが多い）。

BUT+STILL の連語の場合、＜手続的＞＋＜手続的＞ばかりでなく Shakespeare の例など＜手続的＞＋＜概念的＞の段階も認められた。また、談話連結詞としては、(i) but...still (ii) But...still (iii) but still (iv) But still (v) But still, と進むにつれて談話連結詞としての働きが強まるという観察が現代英語・シェークスピアの英語ともに行われた。

SORT OF+LIKE の連語の場合は＜概念的＞＋＜手続的＞となり、SO+CONSEQUENTLY が＜手続的＞＋＜概念的＞と逆の順序で演算していることも分かった。最後に WHY は関連性理論では＜手続的＞意味を表し、高次の発意に対する制約ということを見た。

最後に残された問題は子供の言語習得と談話連結詞の意味変化の順序はどのように関連しているのかということがある。自分の子供を観察していると、まず、談話連結詞を習得してから、指示詞や疑問詞の順序へと進むようであるのに、大人の言語を対象に理論化している言語学では通例、逆の順序で文法化として理論化しているように思える。この現象をどのように考えるかは残された問題である。具体例：

あんな（談話連結詞）＜2.0歳＞-----> あの（指示詞）＜2.8歳＞

なあに、なあに（拒絶を示す談話連結詞）＜1.8歳＞-----> なに（疑問詞）＜2.8歳＞

人間の言葉によるコミュニケーションの進化の中での談話連結詞の発展と子供の言語習得における談話連結詞の発達の関係はどのように考えるのかも大問題である。

## 注

\* 本研究は日本学術振興会平成12年度科学研究費補助金（基盤研究C2）課題番号12610517および、平成12年度神戸女学院大学研究助成金による一部の発表である。

1. Jucker (1993: 436) は 'discourse markers (pragmatic markers)' を次のように特徴づけている：

- i) they do not affect the truth conditions of an utterance
- ii) they do not add anything to the propositional content of an utterance
- iii) they are related to the speech situation and not to the situation talked about
- iv) they have an emotive expressive function rather than a referential, denotative, or cognitive function.

2. 通例疑問詞として使われる why がさらに、談話連結詞として、エリザベス朝英語でよく用いられたことについて、次のように述べている：

'But they can also be used in Elizabethan English as discourse markers which express the attitude of the speaker to what is being said or done' (ibid.) Why used as a discourse marker expresses a certain air of superiority and a touch of mild condescension. It can be paraphrased as 'Why is it that you are so stupid that you cannot see what is obvious to everyone else'. (Cf. Schourup 1995)

3. Nicolle による文法化の問題点と意味変化のプロセスは以下のようである。

- (i) grammaticalization is a gradual process with many individual expressions occupying intermediate positions on a continuum between fully lexical and fully grammaticalized.
- (ii) The five mechanisms of semantic change to be discussed are “metaphorical extension”, the conventionalization of implicature, “generalization”, “harmony”, and “absorption”. (Nicolle 1998: 17)

4. その他の枠組みでの通時的談話連結詞の研究では Traugott & Schwenner (1998) の In fact (fact(N) 1540 ----> in fact 1 (VP Adv) 1670 ----> in fact 2 (adversative, IPAdv) 1730 ----> in fact 3 (rhetorical, Discourse marker) 1810 とそれぞれの出現年数を示している), Onodera (1995: 422) による日本語談話連結詞の通時的研究 (現代日本語の<でも>の語用論的变化は V-te mo (11-16世紀) に由来し、<だけど>は V-kedo (18-20世紀はじめ) に由来するとのべている) は、意味変化の一方方向性仮説 (ideational (propositional) ----> textual ----> expressive が日本語ではどのように修正すべきかを検討したものである。Brinton (1996) による英語談話連結詞の広範囲にわたる通時的变化と文法化の研究なども注目される。

なお、最近の認知 (特にプロトタイプ) 意味論における意味変化の研究では Schmid (1997) による名詞 idea の意味変化 (concept ----> belief ----> aim ----> inspiration) を prototype split としてとらえたり、Nerlich & Clarke (1992) では名詞 bureau, panel, 形容詞 fair, nice などの意味変化を扱い、たとえば、fair の場合には、old prototype (body: ‘beautiful’) ----> new prototype (conduct: ‘equitable’) という変化であると説明している。

5. Andersen (1998: 153) による談話連結詞 like の機能の説明:

The function of *like* is precisely to signal that the speaker is opting for a loose interpretation of her beliefs, thus *like* can be considered a looseness marker.

6. But の意味変化について Arden Shakespeare は次のように述べている:

*But* (E. E. and modern northern English “bout”) is in Old Saxon “bi-utan,” where “bi” is our modern “by,” and “utan” means “without.” Thus but is a contraction for “by-out,” and is formed exactly like “with-out.” Hence but means excepted or excepting. This use of out in compounds may be illustrated by “outstep (except) the king be miserable.”\*

7. 本稿では ONLY の意の副詞の but は簡単化するために、省略した。

(i) She's *but* a young girl.

8. According to the relevance theory proposed by Sperber & Wilson (1986, 1995), new information [actually, newly presented information (including, eg reminders)] is relevant in any context in which it contradicts, and leads to the elimination of, an existing assumption.

Cf. *STILL* is relatively informal and conversational.

9. OED 2-CDROM によれば、形容詞 still の初出年は1205年で、談話連結詞用法の初出年は1722年となっている。

10. 丹治 (1994: 67) によれば、現代では、still は<まだ>とか、<依然として>などの意味

に使われているが、シェイクスピアの時代ではく常に (always) > の意味で使われることが多かった。

11. Lenk (1998 : 252-3) は談話連結詞 *still* の働きを 'conversational aside' と呼んでいる。  
また BUT+STILL の連語については Lenk (1998 : 254) で以下のように述べている：  
Most uses of *still* as discourse marker in the American data are examples of the collocational use of *but* and *still*, expressing the adversativity between the modes of narration in an even stronger way than an isolated use of *still* would.
12. 文頭位の *Still*, の Brown Corpus による例：  
(i) *Still*, he did like music making and even sang in the chapel choir of the Woodberry Forest School, near Orange, Virginia, where he sounded fine but did not matriculate too well.
13. Andersen (1998) による談話連結詞 *like* の様々な働き：  
(i) indicating approximation : e.g. What Thelma and Louise? Yeah, it's wicked! Starts off a bit boring. First, *like*, twenty minutes and then it gets good.  
(ii) suggesting an alternative : e.g. I know, but it wouldn't be any point if someone wanted to be, *like* a doctor and they got into a nursery place.  
(iii) introducing reported speech : e.g. He goes into a McDonald's(...) he's *like*, he's *like* can I have breakfast and he's *like*, breakfast evenen thirty.  
(iii) introducing and in some sense qualifying a proposition  
e.g. Erm, well *like* I usually take the train about twenty past.
14. 言語使用域 (register) の問題で、談話連結詞 *like* を現代米語の特徴とする Schourup (1985), Romaine & Lange (1991) 以外に Scottish English、London English にも見られるとするものもある。また、Romaine & Lange (1991 : 267) は若い女性のくだけた言い方としている。
15. 以下は *Like* の特徴をそれぞれ違った形で述べている：  
Romaine & Lange (1991) : *Be + like* : a marker of reported speech and thought  
Miller & Weinert (1995 : 374) : *like* : a highlighting/focusing device with much the same pragmatic function as cleft sentences  
Miller & Weinert (1995 : 378) : to mitigate the process of clearing up misunderstanding and contradictions by highlighting certain sentence elements  
Schourup (1985) : markers of non-equivalence between a statement and what the speaker has in mind.
16. 談話連結詞 *Like* は話し手が正確な単一の命題を求めていたり (例 (i)), <命令> を表す強いコミュニケーション (ii) とは以下のように共起しない (Cf. Andersen 1998 : 167)。  
(i) Peter : What's your name?  
Mary : \*My name is *like* Mary.  
(ii) \**Like*, go away!
17. なお Tabor (1993) にはコーパスにもとづく詳細な研究があり、a sort of の a が省略され

て sort of になったという reanalysis は問題であるとしている。

18. Itani (1995) による SORT OF の説明：

p.89 *sort of* indicates that the word that it modifies is to be interpreted loosely.

p.104 *sort of* loosens the concept encoded by the following word, directing the hearer to widen its application in some way

19. WHY-2 の様々な用法については Active Genius (1999) と Bolinger (1989) を参照のこと：

1 (主に米) < 以外な発見・認識を表して > まあ、おや、あら：

*Why*, that's the book Tim was talking about. まあ、それタイムの言ってた本だわ。

2 < 質問などの簡単なことへの抗議を表して > なあに、なんだ：

*Why*, a child could answer it. なあに、子どもでも答えられるぞ。

3 < 熟慮のため間を置いて > そうね、えーっと：

*Why*, yes. I think I would. そうですね。してもいいですが。

4 < 反対を表して > なに、なんだって。

5 < 条件の帰結を導く語として > それなら：

If this answer is wrong, *why*, I must try again. この答えが間違っているなら、それならもう一度やらねばならない。

Bolinger (1989) による説明：

(i) Explanations : e.g. If you want to know, *why*, just ask!

(ii) Cases where the answerer goes the question one better : e.g. It's just as good, isn't it? —  
— *Why*, it's even better!

(iii) Situations that seem unreasonable to the speaker : e.g. I can't understand what happened to Eddie! *Why*, just a moment ago he was standing just here!

(iv) Superfluous invitations : e.g. It's Johnny, isn't it? And his two friends? (Pause)  
*Why*, come in! Don't just stand there!

(v) Realizations of something that the speaker acknowledges should have been obvious to him : e.g. Didn't the name 'Gowers' come up in the conversation?  
— (Hesitates and strikes forehead) *Why* yes, come to think of it! And that means...

(vi) Consequences that it seems superfluous to point out : e.g. When they caught sight of my face, *why*, they, practically fainted.

使用したテキストおよびデータ

Arden Shakespeare CD-ROM: *Texts and Sources for Shakespeare Studies* (1997)

Thomas Nelson, Surrey.

ICAME Collection of English Language Corpora (1991)

Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen.

Michigan Early Modern English Materials

<http://www.hti.umich.edu/bin/>

*The Bergen Corpus of London Teenage Language (COLT)*(1993)

<http://kh.hd.uib.no/cgi-dos/colta.bat>

*The Oxford English Dictionary (Second Edition) on Compact Disc* (1992)

Oxford University Press, Oxford.

#### 翻訳書

日本放送協会編 (1981)『尺には尺を』日本放送出版協会

小田島雄志 (1983)『尺には尺を』『オセロ』『リチャード三世』白水社

坪内逍遙訳 (1999)『ザ・シェイクスピア全戯曲 (全原文+全訳) 全一冊』第三書館

福田恒存訳 (1965)『あらし』新潮社

#### 参考文献

- Andersen, G. (1998) "The pragmatic marker *like* from a relevance-theoretic perspective," in A.H. Jucker and Y. Ziv, eds., *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, John Benjamins, Amsterdam.
- Blake, N. (1992-3) "Shakespeare and discourse," *Stylistica* 2/3, 81-90.
- Blakemore, D. (1989) "Denial and contrast: A relevance theoretic analysis of BUT," *Linguistics and Philosophy* 12, 15-37.
- Bolinger, D. (1989) *Intonation and Its Use*, Stanford University Press, Stanford.
- Briton, L. J. (1996) *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Carston, R. (1996 a) "Enrichment and loosening: complementary processes in deriving the proposition expressed," *UCL Working Papers in Linguistics* 8, 61-88.
- Carston, R. (1996 b) "Metalinguistic negation and echoic use," *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.
- Fraser, B. (1999) "What are discourse markers?," *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- Higashimori, I. (1992) "BUT/YET/STILL and relevance theory," 『成田義光教授還暦祝賀論文集』英宝社, 東京.
- Itani, R. (1995) "A relevance-based analysis of Lakoffian hedges: sort of, a typical and technically," *UCL Working Papers in Linguistics* 7, 87-105.
- Jucker, A. H. (1993) "The discourse marker *well*: A relevance-theoretic account," *Journal of Pragmatics* 19, 435-452.
- Jucker, A. H. (1997) "The discourse marker *well* in the history of English," *English Language and Linguistics* 1, 91-110.
- 小西友七編 (1989)『英語基本形容詞副詞辞典』, 研究社, 東京。
- Lenk, U. (1998) "Discourse markers and global coherence in conversation," *Journal of Pragmatics* 30, 245-257.
- Miller, J. and R. Weinert (1995) "The function of *like* in dialogue," *Journal of Pragmatics* 23, 365-393.
- Nerlich B. and D. D. Clarke (1992) "Semantic change: Case studies based on traditional and cognitive semantics," *Journal of Literary Semantics* 21, 204-225.
- Nicolle, S. (1998) "A relevance theory perspective on grammaticalization," *Cognitive Linguistics* 9, 1-35.
- Onodera N. O. (1995) "Diachronic analysis of Japanese discourse markers," in A. H. Jucker, ed., *Historical Pragmatics: Pragmatic developments in the History of English*, John Benjamins, Amsterdam.
- Romaine S. and D. Lange (1991) "The use of *like* as a marker of reported speech and thought: A case of grammaticalization in progress," *American Speech* 66, 227-279.



- Schmid, H. J. (1997) "Historical development and present-day use of the noun *idea* as documented in the OED and other corpora," *Poetica* 47, 87–128.
- Schourup, L.C. (1985) *Common Discourse Particles in English Conversation*, Garland, New York.
- Schourup L.C. (1995) "The discourse particle 'why'," 『女子大文学外国文化篇』 47, 119–189. Sperber, D. and D. Wilson (1986/1995) *Relevance : Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- Taavitsainen, I. (1995) "Interjections in Early Modern English : From imitation of spoken to conventions of written language," in A. H. Jucker (ed.) *Historical Pragmatics*, John Benjamins, Amsterdam.
- Tabor, W. (1993) "The gradual development of degree modifier sort of and kind of : A corpus proximity mode," in K. Beals, G. Cooke, D. Kathman, S. Kita, K.-E. McCullough and D. Testen, eds., *Papers from the 29th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society* 1, 451–465..
- 丹治弘昌 (1994) 「シェイクスピア語彙と現代英語の意味の差について (一)」『駒沢大学外国学部論集』 39, 65–76.
- Traugott, E.C. and S.A. Schwenter (1998) "Invoking scalarity : The development of in fact," Paper delivered at 6th International Pragmatics Conference, Reim, July 1998.
- Wilson, D. (1991) "Varieties of non-truth-conditional meaning," Paper presented at LAGB Spring Meeting, Oxford, March 1991.
- Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic form and relevance," *Lingua* 90, 1–25.

(原稿受理2000年 9 月26日)